し、完具であって動轉しない。

白象寶は陸上を、紺馬寶は空中をはくときの轉輪聖王の乘り物、神珠寶は轉輪聖王の行住坐臥を照らす燈明、玉女寶は聖王の伴侶で執着を無からしめるひと、居士寶は計理係。主兵寶は軍隊で「能く怨敵を伏するに兵杖を用ゐず」（修行經。なお、四神德とは、長壽・健康・容貌・財力である。修行經にいう。

過去久遠世時に王あり、堅固念と名づく。……四天下を領す。……久しく世を治め已る。時に金輪寶、即ち虛空に於て、忽として本處を離る。……王……念言すらく、われ曾て先宿舊に聞く所、もし轉輪聖王にして輪寶移らば王の壽いくばくならじと。われ今すでに人中の福樂を受く、宜しく方便して天の福樂を受くべし。當に太子を立てて四天下を領ぜしめ、別に一邑を封じ下髮師に與へ、命じて髭髮を下さしめ、法衣を服し、出家修道すべし、と。かくて王は太子に位を讓り出家修道する。王が出家して七日、金輪寶が現れなくなる。新王は快からず、父を訪ねて告げる。父は新王にいう。

この金輪寶は汝が父の產せしには非ず。汝ただ聖王の正法を勤行せよ。正法を行じ已って、十五日の月滿つる時に、香湯に沐浴し、婇女に圍繞せられて正法殿上に昇らば、金輪神寶、自然に當に現るべし。

聖王の正法とは何か、との新王の問いに對し、父はいう。

當に法に依って法を立て法を具へ、恭敬尊重、法に觀察し、法を以て首めとし、正法を守護すべし。

さらにくわしく、婇女・王子・大臣・群寮・百官・人民・沙門・婆羅門ないし禽獸にいたるまで、法に依って護視すべきことをねんごろに教える。

新王が父の教えに従って修行しおわり、十五日の月満ちる時、いわれたように高殿に昇ると、自然に輪寶が現前する。新王もまた長い治世ののち、金輪寶が本處を離れると、位を太子に譲って出家し、その七日後に堅固王は忽として命終する。こうして轉輪聖王は、

展轉相承し、正法を以て治め、

ろが、第七代の王は、

自ら用って國を治め、舊法を承けず、その政は平ならず、天下怨訴し、國土損減し、人民凋落す。……永く復た十善の名を聞かず、ただ十惡あって世間に充滿す。是の時すなはち善法の名なし、その人何に由って善行を修せん。このとき衆生よく極惡を爲す。

長ながと引用して來たがここで切りあげて、「秦王飲酒」に返ろう。

七

轉輪聖王は世俗の王だ。しかしかれは天神の前導する金輪に隨い、白象あるいは紺馬に騎乘する。李賀の描く秦王はDas Heilige かDas Profaneかはしらぬが、乘るのは虎だ。虎は『説文』に「山獸の君」というが、『玉篇』には「惡獸」とし、『詩』小雅・何草不黄に

「兕に匪ず虎に匪ざるに、彼の曠野に率ふ」と戦士にたぐえ、『禮記』檀弓に「苛政は虎より猛きなり」と獰猛に喩える。賀の集中に現れる虎は「馬詩」十五で齊の桓公の馬を望見して伏し、「送秦光祿北征」では來馬の師皮にすぎず、「秦宮詩」では漢の外戚で暴虐だった梁冀の奴婢に踏まれ、「古鄴城童子謡」では殺し屋の乘りもの、「猛虎行」では凶惡の象徴、「榮華樂」では梁冀の冠と射貫かれる獲物、「梁臺古意」では漢の皇族で荒侈だった梁王の衰紋、「白虎行」では暴秦の始皇。いずれも否定方向で使用される。「秦王飲酒」だけは例外とはいい難いだろう。

轉輪聖王の巡行した四方の國は「土地豐樂、人民熾盛」だが、秦王の遊ぶのは八極。八極とは八方極遠の地で八荒ともいい、荒蕪野蠻の地とされる。『莊子』田子方第二十一にいう。

列御寇、伯昏无人の爲に射る。……伯昏无人曰く「これ射の射にして、不射の射に非るなり。」是に於て无人、遂に高山に登り、危石を履み、百仞の淵に臨む。……御寇、地に伏し、汗流れて踵に至る。伯昏无人曰く「夫れ至人は上は青天を闚ひ、下は黄泉に潛み、八極に徘徊するも、神氣變ぜず。……」

轉輪聖王の軍隊は怨敵を伏するに兵仗を用いなかった。これこそ「不射の射」だろう。秦王は、

劍光照空天洎碧

轉輪聖王は十善の徳によって日天子となり、日天子は自身光を放って金殿を照し、金殿の光は日宮を照し、日宮の光は出でて四天下を照した。

秦王の劍が光るのは、四天下に遍照する日宮の光の反映にすぎぬ。反映の照すのは空虚であっ

西天下でもなく八荒でもない。日光を受けはするが、受け手の劍は殺人の具。反映はもはや萬物を撫育する日光ではない。秦王の逆行を、青天を闖う至人の業と混同し得ないだろう。曾益が「劍光空を射る、殺氣盛なるなり」という所以だ。天の蒼々として青いのは自ら青いので、秦王には關らぬ。しかし騎虎秦王の殺人劍の妖光が空虚を照すのを許せば、天も變化せざるを得ぬ。青天は自ら碧となる。

賀の集中、碧字は「十二月樂辭・四月」の碧滿、「古悠悠行」の碧華、「惱公」の碧鳳、「難忘曲」の春碧のように美景・姿に用いることもあるが、その場合も夜景や反映ないし女性の美に當てられる。他面、「狄來」の恨血千年土中碧、「金銅仙人辭漢歌」の三十六宮土花碧、「老夫採玉歌」の採玉採玉須水碧、「艾如張」の張在野田平碧中、「神絃曲」の笑聲碧火巢中起のように、怨むべく、悲しむべく、憤るべく、怪しむべき場景の妥の位置に點ぜられるのが、この色彩であった。「秦王飲酒」の碧も、歡喜すべき澄清の方向に下した文字ではないだろう。王琦が「天も亦たその意に違はず」といい、陳本禮がこれをうけて「天も亦た之を如何ともするなきなり」というのは、碧が天の不如意を表す色であることの指摘だ。

義和敲日玻璃聲

『書』の堯典に「（帝堯）四表に光被し、上下に格る。……乃ち義和に命じ、欽みて昊天に若ひ、日月星辰を曆象し、敬みて人に時を授けしむ」といい、屈原の「離騷」に「日忽忽として其

れ将に暮れんとす。吾れ羲和をして節を弭めしむ」といい、注に「羲和は日御なり」という。また『山海經』大荒南經には「東南海の外、甘水の間、羲和の國あり。女子あり、名づけて羲和という。方に日の甘淵に浴す。羲和は帝俊の妻にして十日を生む」という。神話としては『山海經』が古いようだが、「秦王飲酒」では『書』や「離騒」という日の御者としての羲和なのだろう。

『長阿含經』によれば、日天子は行くとき、自ら行く意なく、しかも捷疾に行くものだった。太陽が常に停止するように見えるのに、朝は東天に在ったものが夕には西天に在る推移の速かさをいうのらしい。

碧字はさきに述べたように李賀にあっては怨むべく悲しむべき色であり、また夜の色である。青かるべき天が自ら碧であるとは、天に変化の生ずること。劫末の到来を豫兆するものとも、夜の到来を告げるものともいえるだろう。夜の到来が早まったとすれば、日車の速度をあげなければならぬ。曾益は「敵は鞭うつなり」といい、陳本禮は「當時その殺戮塗炭に遭ふ者、みな羲和の速かに日馭に鞭うち、以て此の惡劫世界を了らしめんことを願ふ。即ち、時の日島か喪びん、予と汝と偕に亡びん、の恨」という。「時の日……」は『書』湯誓に見え、夏の桀王の時代に人民が暴君を怨んだ言葉で「この太陽はいつ亡びるか。おれたちはお前といっしょに亡びよう」というほどの意。劫末到来の迅速を人民の側の願望と見れば、陳氏の解のごとくであろう。

天金と頗梨から成る日宮殿は赫灼と光明を放つけれども、常に靜かで音を立てない。だが天が変化し、羲和に敲打されて、常ならぬ速度で、夜に、劫末に向って疾駆せねばならぬとすれば、無言の日宮殿の頗梨も、聲をあげざるを得ぬ。

劫灰飛盡古今平

劫盡は、世間の衆生がことごとく光音天に上ることによって、即ち善業の結果としても起り、光音天の衆生がことごとく世間に下ることによって、即ち惡業の結果としても起る。微視的には人間の行業は劫の進行に關るようだが、巨視的にはちっぽけな人間の善惡などは大海の泡のように無常の大變化のうちに呑みこまれてしまう。「古悠悠行」の今古何處盡はそれを時間について言い、「天上謠」の東指義和能走馬、海塵新生石山下は空間について言うのだ。劫が盡きて、天地が崩壞し一堆の灰燼となり黑風に飛散すれば、時間もまた消滅する。戰國時代の論理家惠施は「今日、越に出かけ、昨日、着く」という命題を立てた。無限大の時間から見れば、今日から明日への時間の經過はゼロに等しく、ゼロに前後を設けるのは無意味だ、というのが命題を支える論理らしい。劫は無限大の時間で、無限の時間が無常のうちに無限に循環するとすれば、そこには古もなく今もなく、無常において平等だといわばならぬ。それがここにいう「古今平」だろう。

この諸行の無常を、さらに無常と見るのが佛眼で、「衆生の、劫盡きて、大火に燒かるると見る時も、わがこの土は安穩にして、天人つねに充滿せり」と『妙法蓮華經』如來壽量品第十六にいうのは、靈山淨土が佛神力によって三災四劫を超出することをいう。龍樹の『大智度論』にまた劫盡き燒くる時も、一切衆生は自然にみな禪定を得」というのも同樣だろう。

ただ、佛の神力も靈山淨土も、衆生の肉眼肉耳が見聞しうる姿に描かれるとき、神力と淨土をも衆生から奪って獨占しようとするのが世俗の王の常。かれらが「世尊」をさえおのれの侵略收

奪を正當化する旗印とするとき、衆生のなかの菩薩が「夜叉王」となって「世尊」に究問するのが『入楞伽經』請佛品の秘義であろうことを、拙稿「世尊と夜叉王 ― 楞伽經雜記 ―」（『李賀研究』第九號）で說いた。

『妙法蓮華經』も『大智度論』も讀んだであろう李賀がそれらの名を露はにせず、詩中の案前に『楞伽』を堆（うずたか）くしたのは、かれがその詩を金剛杵として向わねばならぬ相手が、「世尊」を僭取し轉輪聖王を氣どる「秦王」だったからである。

そのとき、世尊は、智慧をもって觀察した、現在の大衆を。肉眼で觀じたのではない。師子王のように、ふるいたち見まわして、はっはっと大きく笑った。頂上の肉髻は、無量の光を放ち、肩・脇・腰・髀・胸の卐のうずまくところ、およびもろもろの毛孔は、一切の無量の光明を放った。宮中の虹のようだ。日の千の光のようだ。劫の盡きるときがきて、大火はげしく、猛炎をあげる相のようだ。帝釋・梵天・四天王らは、虛空中から觀察した。如來が佛を見て、スメール山に坐って、ランカー山の頂上にむかって、はっはっと大きく笑っておられるのを。

李賀が劫盡をいうとき『入楞伽經』（十卷本）のこの一節を思わなかったはずはない。「前稿」でいったように『大乘入楞伽經』（七卷本）にも梵本（安井廣濟譯『梵文和譯入楞伽經』一九七六年・京都）にも對應する文はあるが、危機性の把握において十卷本には及ばぬ。

諱事件で躓く以前の李賀は、唐の朝廷の前途について朗かに詠歌讚頌しえた。だが目覺めて『楞伽』を通過したかれは「秦王」たちの尊の姿を如實に觀察し、正確に表現せざるを得なかった。

「秦王」たちの夢の姿とは何か。この詩でいえば第五句から第十三句にいたる飲酒がそれだ。

八

龍頭瀉酒邀酒星

「龍頭」を呉正子は「酒を瀉ぐ器なり、雜むに龍形を以てす」といい、王琦は「禮記に、夏后氏は龍勺を以てす。鄭元註に、龍は龍頭なり。孔穎達正義に、勺は龍頭を爲す」といい、『古今圖書集成』考工典第一百九十六卷に「漢龍首斗圖考」を載せ「詩に云ふ、酌むに大斗を以てすと、則ち斗も亦た以て飲器となすべきなり」という。近ごろ中國で發掘される古代飲器にも龍頭のものがあったと記憶する。王琦の引く『北堂書鈔』には「西征記に云ふ、太極殿前に銅龍あり、長さ二丈、銅尊四十斛を容る、正旦大いに羣臣を會す、龍、腹内より酒を受け、口より之を尊内に吐く」という。『西征記』は晉の戴祚、字は延之の作。なお孔氏影抄本『北堂書鈔』には「羣臣」の二字がない。丘象隨は「龍頭一飲、自ら數千人なるべし。秦人謚に『天帝、秦暴に醉ふ』なるあり」という。何に據るのか知らぬが、ここの注としてはひったりだろう。

「酒星」について王琦の引く後漢の孔融の「酒禁を論ずる書」（『全後漢文』では「難曹公表制酒禁書」）に「天は酒星の耀きを垂れ、地は酒泉の郡を列ぬ」といい、『晉書』天文志に「軒轅の右角南の三星を酒旗といふ。酒官の旗なり。宴饗飲食を主る」

金槽琵琶夜倀倀

「金槽琵琶」につき呉正子・丘象隨は撰人不明の『談賓錄』を引く。丘氏のが詳しい。「中官の白秀貞、琵琶を得て以て獻ず。その槽邏はみな紫檀もて之を爲る。溫潤、玉の如し。金縷紅文あり、影、雙鳳を成す。楊妃の奏する毎に音韻凄清、飄として雲外の如し」。曾益は「倀響を金槽に聽く」という古詩句を引く。「倀」は物と物とが觸れることをいい、『文選』の謝惠連「古冢を祭る文」に、冢中より出た木人が「物を以て之を倀撥すれば、手に應じて灰滅す」という。「倀倀」は擬聲音だが、『新唐書』五行志には地獄の使者としてあらわれる。「貞觀十七年七月、民の訛言に、官、倀倀を遣して人を殺して天狗を祭ると。云ふ、その來たるや身に狗皮を衣、鐵爪、毎に閨中に於て人の心肝を取って去る、と」　この年二月、太宗は凌煙閣に功臣を畫かせた。「天寶三載二月、星あり、月の如し。東南に墜つ。墜ちしのち聲あり。京師訛言す。官、倀倀を遣し、人を捕へ肝を取って以て天狗を祭る、と」　天寶は、玄元皇帝、即ち唐朝李氏の祖先といわれる老子が、玄宗の夢中で丹鳳門に降り、帝德が天によって證明された稱した年號である。賀が金槽琵琶の聲に「倀倀」の音を選んだのは、この有名なたび重なる訛言の不吉を熟知した上でのことだろう。

洞庭雨脚來吹笙

曾益は「洞庭」を『荘子』天運篇に據るのだろう、という。「北門成、黄帝に問うて曰く、帝、咸池の樂を洞庭の野に張りしとき、われ始めて之を聞くや懼れ、復た之を聞くや惑り、卒に之を聞きて惑ふ。蕩蕩默默として乃ち自得せざりき」（拙著『荘子傳』参照）

「泰王」を前秦の屬王苻生と見る陳本禮は、ここでもいう「史稱す、樂奏するとき苻生みづから歌ひて之に和す。故に繁絃急管一時に齊奏し、嘈嘈雜雜、洞庭の雨脚の驟ぎ來って後れんことを恐るるが如きなり」その史が何かを知らぬが、嘈嘈雜雜を讀みとったところ、好釋とすべきだ。

酒酣喝月使倒行

月を呼びかえして夜宴享樂の時間を永久ならしめようとするのだ。日を敲打して時間の進行を速めようとするのと反對だが、どちらも人間の恣意から出る點では同じだ。前句とこの句、劫末の黒風が大海を吹き、大海がぽっかりと二つに割れ、その底から日宮殿が舞い上ってくるあの恐るべき場面が、夜の鏡に倒映するような、ふしぎな感覺を呼ぶ。

銀雲槨槨瑤殿明

「銀雲は白雲なり。月光これに映じ、燦爛として銀の如く、下、宮殿に映じて、皎として白晝の如し」と王琦が解くのは、なかなかいい。「銀雲槨槨は曉なり。瑤殿明は曉光の入るなり」と

曾益がいうのもいい。「感懷五首」その三の、月午樹無影、一山唯白曉、に匹敵する鬼趣である。だが恐らく、この明らかな瑤殿は、呼び返された月に照されて明るくなる秦王の宮殿ではなく、呼び返す人にかかわりなく、銀雲の間を静かにおのれの進むべき方向に進む月宮殿だろう。

前句の狂躁とこの句の静謐の結合から生れる奇異の美しさは無類だが、この句と同じ韻字を持つのは「兩儀殿聯句」では長孫無忌の句であった。そうと氣づいて無忌の句をこの句で霞えば、他の四句、太宗・李神通・房元齡・蕭瑀のいずれもの、言葉の意味のめでたさにかかわらず「酒酣喝月使倒行」の狂躁の聲にほかならぬことが見えてくる。

宮門掌事報一更

月天子は、秦王がいかに倒行させようとしても倒行せず、その定まった進行を變えぬことが、銀雲の櫛櫛と瑤殿の明るさによって示されると、秦王に媚びる側近が思いついて演出するのがこの詭計だ。曾益は「宮門郎は内外宮門鎖鑰の事を掌る」という『大唐六典』を引いて、宮門の開閉のほかに夜廻りや時報もうけもつのだ、という。その宮門郎に命じて「五更」と報ずべきところを「一更」と告げさせたのである。秦王も宴に侍する男女もそれを知らぬはずはない。だがいよいよ耽溺を欲するのは當の彼らなのだから、この詭計にやんやと湧いて、歌唱亂舞もいよいよ仇めき狂おしい。

花樓玉鳳聲嬌獰

曾益は「玉鳳嬌獰、笑歌の聲まさに沸くなり」という。適解である。「獰」字を「停」と見る説があるが、その要はない。「上文に已に琵琶吹笙を言ふ。應に數語を雜敍せし後、又た復た簫を言ふべからず。蓋し花樓玉鳳の一句、歌聲の婉轉を謂ふ」という。だがここでは「宮門掌事報一更」によって場面が故意に過去に引きもどされているのだ。「又た復た笙を言ふ」ことによって詭計が自ら露わになっているのだ。

海綃紅文香淺清

海綃は普通は鮫綃といい、人魚のうすぎぬである。晉の張華の『博物志』に「鮫人は水居するも出でて人家に寓し綃を賣る。去るに　み、主人より器を索め、泣いて珠を出だし、盤に滿て以て主人に與ふ」というらしい。梁の任昉撰と傳える『述異記』に「南海より鮫綃紗を出だす……一に龍紗と名づけ、價百餘金。以て服と爲し、水に入るも濡れず」といい、宋の孫光憲の『北夢瑣言』巻十三に「張建章、幽州の行軍司馬と爲る。……曾て府の戎命を以て渤海に往き、……水仙に遇ひ、鮫綃を遺らる。之を軸けば帛の如く、紅線三道を以て之を劄す。夏天清暑に展開すれば以て滿堂凜然たらしむべし」という。珍奇なもので、わが日本でならば天人の羽衣にも當ろう。その薄ぎぬに紅の紋をおいたのが海綃紅文だ。「秦王」が水中の眞珠を奪うことを李賀は「老夫

採玉歌」や「感諷五首」でうたうが、ここでは鮫綃である。秦王の美女がこれをまとって舞い、その舞うにつれて清らかな香がほのかに泛うというのであろう。

『中阿含經』巻第八未曾有法品阿修羅經第四にいう「婆羅邏阿修羅王……夜將に旦(あ)けんとするとき佛所に往詣し……曰く「世尊よ、我が大海中の諸阿修羅に衰退あることなし。……我が大海中、多く珍寶無量璫異種種の珍琦ありて其の中に充滿す……」

秦王の宮殿においてこそ、人間の淫靡の飾りとされても、鮫綃も眞珠も、もとは水中仙界のもの。秦王の恣意に媚びて設定された虚偽の時間の中におかれはしても、鮫綃は大海の時間のうちに生きており、その放つ香は深海にあるときの穠郁は失っても、なおかつ眞の時間の清淺を保ち、その香によって虚偽の時間を浸蝕する。

鮫綃を「海綃」と表現するのは、たぶん李賀がはじめだ。近代の詞人陳洵がこれを號としたのは、かれが南海の人であることにのみ據るのではないだろう。

黄鵝跌舞千年觥

黄鵝は、呉正子が引いた杜詩にいう「鵝兒黄似酒」（舟前小鵝兒）で酒で、「黄娥」とみるのはおそらく誤りだ。秦王が「千年觥」と僭稱する大杯に、波立つ酒がよたよたと踊る鵝鳥の子のようだ、というのだ。この詩に諷刺を見るとするなら、ここにその頂點がある。

仙人燭樹蠟燈經

呉正子はいう「仙人燭樹、梧桐に似、その皮枯剝して桂の如く、以て燭と爲し、數十刻を然すべし。亦た葉廷珪の海錄辞事に見ゆ」王琦はいう「王宮の夜宴、奢侈を窮極す、未だ必ずしも肯て草木の皮を用ゐて以て燭に代えず。或は燭上に仙人の形を畫けるか、或は燭臺を仙人の像に作れるか、或は是れ當時この佳名の燭ありしか、俱に未だ定むべからず、其の樹といふは猶ほ枝のごときなり。燭の數を記すに幾枝といふ、古今に通じてこの種あり」。いずれが不可ということはなく、仙人の形の燭ぐらいのところでよい。

阿含部の小經に『佛說薄鉢多酥哩論捨野經』があっていう。「劫相末時、七日出現し炎熱至極、忽然火起して十束の柴を燒くが如し。……忽ち大風起り、煙焰とその灰燼を吹去して都て有る所なし。譬へば人あって虛空中に其の酥油もて一燈燭を然すに、燈焰滅せし後は緊煙と灰と全く少許も無きが如し」

この經は趙宋の代に法賢が訳したので、先だつ李賀の典據とはなり得ぬが、劫灰飛盡を燭煙滅去と譬喩することは隋唐の僧によってもなされていたろうから、この句の參考とすることは許されようか。すなわち、虛空中に酥油をもって一燈燭を然す人を、賀の詩中の仙人と見るのだ。

清琴醉眼溯泓泓

この「清琴」は『文苑英華』の注にいうように「青琴」とするのがよいだろう。『文選』の司馬相如の「上林賦」に「夫の青琴・宓妃之徒の婦き、絶殊離俗、妖冶嬝都」といい、伏儼が「青琴は古神女なり」と注する。「上林賦」ですでにそうであるように「青琴」は「秦王」に侍る美如である。だがそこから世俗性を捨象すればやはり古神女だ。『後天子傳』で中國の王の觴を受けて「將はくは子よ死する無かれ」といった西母は神女だった。宴はともにしても中國の王が死すべき者であることを知っていたのは「死する無かれ」の語に現れている。巫山の婦人は神女だ。高唐の臺で楚王に枕席を薦めはしたが、去って雲雨となって王の世俗性を悲しみ、再び來なかった。

轉輪聖王の宮中では高幢の上に光を放って夜冥の大地を照す神珠寶も秦王の宴席に置かれると道教風の古怪な仙人に堕落して臭い蠟煙を放って劫末の腐敗を豫兆せざるを得ない。轉輪聖王の伴侶としてその欲望を惡悪に轉化させる玉女も秦王の宮中では青琴となり、長夜の宴に醉いはしても秦王がついに聖王でないことを知り、眼に涙をいっぱい泛べていたのだろう。

九

陳允吉氏は「秦王飲酒」が古樂府「秦王卷衣」を繼承する、という。徐渭らがすでにそのことを示唆する。李白の「秦女卷衣」は「秦王卷衣」の繼承といえようが「秦王飲酒」はそうではあるまい。